

令和8年度 自己評価計画書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
1 「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。  ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。また、生徒1人1台端末を効果的に活用しGIGAスクール構想を展開するなどして、生徒の主体性を高め、学びに対して自走する力を育成することで、生徒の高い進路志望の実現をめざす。	① 授業において「本質に触れる指導」「生徒の主体性や対話力を向上させる指導」を目指す。そのために、「本質に触れる指導」や「学習における生徒の自走」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループ単位で行い、授業改善に取り組む。	教務課	昨年12月に実施した学習評価で、「学力の向上など、自分自身の成長を実感できる」の質問に対する全体平均値が3.49であり、7月実施学習評価から全体で0.01ポイント下降した。“主体性を高める指導法”の研究・開発を継続し、「本質に触れる授業」に取り組みつつ「生徒の自走」をさらに促したい。	【満足度指標】 生徒が「学力の向上など、自分自身の成長を実感できる」と感じている。	「学力の向上など、自分自身の成長を実感できる」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて加えた全体平均値を算出する。 ① 「よくあてはまる」 ② 「ややあてはまる」 ③ 「あまりあてはまらない」 ④ 「全くあてはまらない」 算出した値が、 A 3.60以上 B 3.50以上 C 3.40以上 D 3.40未満	C・Dの場合、授業改善に向けた取り組みの再検討を行う。	生徒による学習評価を実施
	② 生徒に、模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学科説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、習熟度別授業の実施や校内模試問題の研究により深い思考力の育成を進める。	進路指導課	3年生の難関10大学志望者数は、前年度2月の進路志望調査によると281名、その中で東大と京大志望者が合わせて124名である。2年生の難関10大学志望者数も271名と、どちらも例年より多く、高い志望を維持している。	【成果指標】 東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が増加している。	東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が増加している。 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満	C・Dの場合、授業や3年間を見通した進路指導について、再検討を行う。	年度の当初に入試反省会、年間数回の志望校検討会を実施
	③ ホーム担任を中心に、年間5回以上の個別面接指導を実施し、文理選択を含め自身の進路について考えさせる。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導により、家庭学習の定着を図る。	1学年	生徒が新たな生活に1日も早く慣れ、学習と部活動とを両立できるような良い生活習慣、さらには基本的な学習習慣を身につけさせるべく指導を行っている。そのためにも、各面談で何を確認するのか、どのようなメッセージを生徒に伝えるのかについて担任で言葉をそろえ、目線を合わせたうえで指導していく。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、自分を見つめさせ、高い進路志望の確立を図る。また、意欲を喚起する授業や学年集会などを通して、自発的な学習を促す。	2学年	1年より個人面談や学年集会等を通し、自己の特性や得意不得意を見つめさせることで、徐々に高い進路志望を持つ生徒が増えている。3年生に向け、学びに対して自走できるたくましい生徒を増やしたい。同時に、学習に不安を抱える生徒には、個に応じた面談や細やかな指導を通して自信をつけるとともに、確かな学力のさらなる定着を図っていく。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	⑤ 本質に触れる質の高い授業を提供し、また放課後補習および個人添削指導等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた、「個に応じた指導」も展開していく。	3学年	生徒がそれぞれ目標に向かい、学習できるよう指導を行ってきた。素直な生徒が多いが、より貪欲になって欲しい面もある。また、進路について悩んでいる生徒もいる。今後も生徒一人一人の進路志望の実現に向けて、個別対応をはじめ、様々な視点からのアプローチを進め、さらに高い学力の向上を図っていく。	【成果指標】 難関10大学及び国公立大学医学科医学科の合格者数が多い。	難関10大学及び国公立大学医学科医学科の合格者の合計人数(重複可)が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満	C・Dの場合、授業や補習、個人添削等の方法について、再検討を行う。	次年度の当初に入試反省会・検討会を実施

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
2 探究活動プログラムの進化・発展に努める。  ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させ、探究活動の高度化と校内DX化を図る。その実現に向けて、地域や学校をこえて生徒が集い、生徒や教職員が企業や大学のホンモノの科学に触れ、協働することで課題を設定し解決する力をはぐくむ探究活動を推進する。	① これまで取り組んできた自然科学的な探究活動の成果を活用し、生徒の多面的・多角的なものの見方、思考する力、行動する力など探究する力の向上を図る。また、本校生徒だけにとどまらず、様々な学校の生徒と交流・協働する機会を設けることで、より実践的な課題解決能力を育む。	SSH推進室	文科省より指定を受けたSSH認定枠指定校として、SSH事業で得られた様々な成果を県内外へ展開・普及している。現在実施している自然科学的な探究活動のプログラムは研究開発の成果である。さらに、加速支援を受けることになった今年度は、地域連携を強化し、様々な学校の生徒どうしの交流によって探究活動の質を向上させ、持続的に生徒の課題発見・解決能力を育む探究活動を実践できる体制を構築していく。	【満足度指標】 生徒が、探究活動を通じて「思考する力」「分析する力」「行動する力」「表現力」（いわゆる「探究力」）を身につけている。	学校評価アンケートにおいて、「自分自身の探究する力、思考する力、行動する力」「思考力・分析力や表現力」が高まったか。の設問に対して、「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合の平均が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、計画の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
	② 課題研究を軸とした探究活動プログラムの改善を図り、より文理融合を強化したカリキュラム開発を行う。また、グローバルリーダーに必要な種々の能力の育成を目標とし、その達成のために事業を展開する。	SGH推進室	5年間のSGH指定期間において確立した課題研究を軸とした探究活動プログラムを継承しながら、現在はその成果をより持続性の高いものへと発展させることを模索している。あわせて、文理融合による生徒同士の学びの充実化も図っている。また、各種発表会や異文化交流行事において、他のグループの生徒や他の文化出身のゲストと問題意識を共有したり、自分の考えを丁寧に表現する機会をより多く確保したいと考えている。	【満足度指標】 生徒が、「問題意識を問いとして組み立てる力」（思考力）、「考えの異なる他者とも協働しながら物事を進める力」（協働力）、および「自分の考えを相手に論理的に表現する力」（表現力）を身につけている。	『SG探究基礎』（1年）『課題探究Ⅰ』『SG探究』（2年）『課題探究Ⅱ』『SG探究活用』（3年）において、グローバルリーダーに必要な思考力、協働力、表現力を身につけているかという項目で、「よくあてはまる」「ややあてはまる」とする生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  ・挨拶の励行や校内美化、様々なマナーを遵守することで周囲から応援される人づくりを推進する。また、部活動・生徒会活動・学校行事等を通して、自分の考えを発信するとともに他者の考えも尊重し、集団の共通目標に向かって協働して粘り強く行動する力を育成する。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高めるとともに、リーダーシップを発揮し、グローバル人材としての資質を育成する。	総務課	令和7年度の「生き方講演会」では、明海大学外国語学部教授小谷哲男氏をお招きし、「よくわかる国際情勢」という演題でご講演いただいた。ウクライナ情勢をはじめとして中国やアメリカなどの事例を題材とし、5つの基本概念と3つの分析枠組みを知ることによって現代の国際情勢を容易に理解することができ、生徒の興味を大いに引きつけた。その他の講演に関しても生徒のニーズを十分に考慮し、講師や講演内容を慎重に検討した上で有意義なものにしていく。	【満足度指標】 講演会が、生徒にとって貴重な知識や経験を学び、生き方や価値観を考える良い機会となっている。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、講師の選定等を工夫する。	生徒へのアンケート調査を実施
	② 基本的な生活習慣の確立を図ることを目的に、以下の挨拶指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・職員室等の入室マナー ・授業の開始、終了の挨拶	生徒指導課	登校時や校内（廊下等）では、自主的に挨拶をする生徒が増えてきている。しかし、来校者に対する挨拶や入室マナー等は、まだ十分ではない。	【成果指標】 生徒が、来校者への挨拶、職員室等の入室マナー、授業の開始・終了の挨拶をしている。	「本校生徒は、来校者への挨拶、職員室等の入室マナー、授業の開始・終了の挨拶ができています」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	生徒指導課	年間3回実施している「生活についてのアンケート調査」や担任による個別面談を通して、生徒が抱えるトラブルを早期に発見し、対応することができた。今後もいじめ問題やネットトラブルについて、研修会等を通じて教員が理解を深め、適切な対応ができる体制を確実に作っていく。	【成果指標】 互いに認め合い助け合う仲間づくりができる生徒が多い。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	生徒指導課	部活動加入率は高く、意欲的に活動し、有意義であると考えている生徒が多い。運動部は総体総合成績において公立高校1位である。文化部でも多くの部が上位大会に出場し、優秀な成績を収めている。	【成果指標】 上位大会（ブロック大会以上）に進出する部活動が増える。	県予選を通過しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	C・Dの場合、次年度へ向け、指導方法を工夫する。	県総体・総文等の結果報告による

## 石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ゴミの分別や節水・節電に取り組む。	保健 環境課	探究活動などを通して学んだ、地球環境と調和した持続可能なライフスタイルについて、知識として深めるだけでなく、自らの生活の中で実践できる姿勢を育てていく。	【満足度指標】 生徒が、環境保全を意識して生活し、実践している。	校内の環境保全活動に努めていると答え た生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 取り組みの見直し・改善を 検討する。	生徒へのアンケート調査を実施
	⑥ 読書推進活動と学習環境整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などにより、貸し出し冊数や入館者数の増加をはかる。	図書課	情報メディアの普及による読書離れの傾向は本校生徒にも及んでいると推察されるが、普段からの読書啓発・読書推進活動はもとより、授業や教科学習と連動した読書や図書館利用の一層の充実を図ることが喫緊の課題である。	【成果指標】 1年間の図書の貸出し冊数が増加している。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 3,500冊以上 B 3,000冊以上 C 2,500冊以上 D 2,500冊未満	C・Dの場合、 取り組みの見直しと改善を 検討する。	月毎の貸出数調査を実施
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が自己研鑽に努め安心して学校生活を送ることができるよう支援する。	教育 相談室	自分の進路に対する不安や学習面でのつまづき、人間関係、家庭における悩みによって、学校生活への意欲を失いかけたり、情緒が不安定になったりする生徒が見受けられる。	【満足度指標】 相談室を利用した生徒が、気軽に相談でき利用しやすいと感じている。	相談室を利用した生徒へのアンケート 「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 学年、関係各 課と連携して 対策を検討 する。	生徒へのアンケート調査を実施
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。  ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。HPを魅力的なものに整備し、本校の方針や特色ある取組、生徒の活動の様子を積極的に社会に発信する。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりにめざす。	総務課	令和7年度の参加人数について、「PTA総会」が1,097名、「いしかわ教育ウィーク」期間中は590名であった。今後も保護者が来校しやすく、学校をより一層理解していただけるよう内容をより充実させるとともに、周知方法を工夫していく。	【成果指標】 「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク期間中」の保護者・地域住民の来校合計数が増えている。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク期間中」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1,500名以上 B 1,200人以上 C 900人以上 D 900人未満	C・Dの場合、 PTAと協力して 広報活動に努 める。	PTA総会 (5/9) いしかわ教育 ウィーク (11/1~7)
	② 理数科1,2年生、普通科1,2年生及び、科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスクラブ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実させることで、科学教育を推進する。	SSH 推進室	毎年理数科1年生が、創立記念祭に来校した小学生等に対して理科教室を開催し、参加者から好評を得ている。また、金沢子ども科学財団と共催する金沢泉丘サイエンスグランプリやサイエンスヒルズこまつ主催のサイエンスフェスタに参加し、高校生と小中学生が協働活動することで、科学教育を推進している。今後は、活動の範囲を広げていきたい。	【満足度指標】 理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムへの参加者が、大変良かったと感じている。	理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムへの参加者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、 取り組みの改善 を検討する。	参加者へのアンケート調査を実施
	③ 「学年だより」、「進路だより」「学校HP」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	1学年 2学年 3学年	定期的に「学年だより」「進路だより」を発行している。12月に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者は81.4%である。発信が一方通行であったため、今年度は双方向やり取りができるよう工夫する。	【満足度指標】 学校からのたより・通信等によって、保護者が学校の様子をわかっている。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、 内容の改善を 検討する。	保護者へのアンケート調査を実施
	④ 被災者や震災支援などに携わった方による「防災講話」を開催するなど、防災意識の向上や災害時の対応力の育成を図る。	総務課	令和7年度は、小松市民病院の西野拓磨氏をお招きし、「災害医療、能登半島地震での活動」という演題でご講演いただいた。災害現場におけるリーダーシップや被災者に寄り添う救助・救援活動について考えさせられた。	【満足度指標】 防災講話によって、防災への意識が高まったと感じている。	防災への意識が高まったと回答した生徒が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 内容の再検討 を行う。	生徒によるアンケートを実施

<p>5 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。</p> <p>・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。また、生徒や教職員のウェルビーイングが高まるよう、管理職は、風通しの良い職場の雰囲気作りに努める。</p>	<p>① 業務の見直しや密度の濃い会議運営など、組織運営の効率化を進め、職場環境の改善や教職員の意識改革、時間管理の工夫を図る。月に2回の定時退校日に加え、各自で2回、定時退校日を新たに設定する。これにより、教職員のワーク・ライフ・バランスの調和を実現し、教育活動の質の向上を目指す。</p>	<p>管理職</p>	<p>月に2回の定時退校日、部活動休養日、夏季休業中の学校閉庁日の設定や、職員会議等を勤務時間内に収める工夫、自動採点ソフトの活用や会議のペーパーレス化などを通して業務の効率化を進めてきた。その結果、ワーク・ライフ・バランスの意識の向上には一定の成果が見られる。ただし、時間外勤務時間には個人差が認められ、業務の偏在の是正や、業務内容の精選・見直しが必要である。時間外勤務時間の昨年度平均は、39.6時間であった。今後も教職員の負担軽減を図りながら、教育活動の質の向上につながる取り組みを、組織的に構築していく。</p>	<p>【満足度指標】 教職員がワーク・ライフ・バランスを実現することにより、気力、知力、体力が充実し、より効果的な教育活動が展開できている。</p>	<p>ワーク・ライフ・バランスをとることに より、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>C・Dの場合、次年度に向けて、内容の改善を検討する。</p>	<p>教職員へのアンケート調査を実施</p>
---	--	------------	--	--	---	-----------------------------------	------------------------